

CGMを用いたトレラグリプチン 反復投与後の血糖日内変動の検討 —血糖降下作用は7日間持続するか—

大西 哲郎¹⁾, 谷口由紀子²⁾, 塩田 吉宣³⁾, 森 豊⁴⁾

塩田病院内科¹⁾, 新山手病院生活習慣病センター糖尿病科²⁾

塩田病院外科³⁾, 東京慈恵会医科大学附属第三病院糖尿病代謝内分泌内科⁴⁾

Key words▶

トレラグリプチン
DPP-4阻害薬
週1回製剤
血糖日内変動

要旨

2型糖尿病患者18名を対象に、外来にてトレラグリプチン100mg/日を投与し（単独/追加投与16名、シタグリプチン50mg/日からの切り替え2名）、投与前、3回投与7日目と4回投与1日目の血糖日内変動をCGMで比較した。単独/追加投与群では、24時間平均血糖値、SD、血糖変動幅総面積、MAGE、高血糖の割合は有意に低下した。一方、切り替え群では、これらの指標は変化を示さなかった。全18症例の3回投与7日目と4回投与1日目の比較では、4回投与1日目の24時間平均血糖値、高血糖の割合は、3回投与7日目と比較して有意な低値を示した。血糖日内変動のデータからは、本剤の血糖降下作用は1週間必ずしも均等ではない可能性はあるものの、通常のDPP-4阻害薬とほぼ同程度の血糖降下作用は期待できるものと考えられた。

○はじめに○

現在、経口血糖降下薬は7系統が使用されており、その作用機序から「インスリン抵抗性改善系（ビグアナイド薬、チアゾリジン薬）」、「インスリン分泌促進系（スルホニル尿素 [SU] 薬、グリニド薬、DPP-4阻害薬）」、「糖吸収・排泄調節系（ α -GI、SGLT2阻害薬）」に大別される¹⁾。一方、血糖変動に及ぼす効果の観点から、「主に24時間の平均血糖値を低下させる薬剤（ビグアナイド薬、チアゾリジン薬、SU薬、SGLT2阻害薬）」と「主に血糖変動幅を縮小させる薬剤（ α -GI、グリニド薬）」に分類することも可能で

ある²⁾。DPP-4阻害薬はこの両者の特性を備え^{3,4)}、低血糖をきたすことなく食後高血糖を改善し、血糖日内変動を平坦化させながらHbA1cに相当する24時間平均血糖値を低下させる。最近、上市された週1回投与のトレラグリプチンは、アログリプチンにフッ素を付加することによって作用時間を延長させることに成功した製剤である。この持続性選択的DPP-4阻害薬であるトレラグリプチンは、DPP-4阻害作用が1週間持続することが確認されており⁵⁾、週1回投与による服薬回数の減少により良好な服薬アドヒアランスの維持が期待されている。しかしながら、トレラグリプチン反復投与後の服薬1

日目から7日目までの血糖降下の持続性については、現在のところ報告はない。本研究では、トレラグリプチンの反復投与後の投与1日目と7日目の血糖日内変動についてCGM (Continuous Glucose Monitoring) を用いて検討した。

○対象と方法○

当院外来に通院中の、既存の治療で血糖コントロールが安定している2型糖尿病患者18名（年齢：66.8±7.8、男/女：13/5、BMI (body mass index)：27.5±5.8kg/m²、HbA1c：7.5±0.7、GA：19.0±2.6、1.5AG：8.8±5.8)を対象に、外来にてトレラグリ